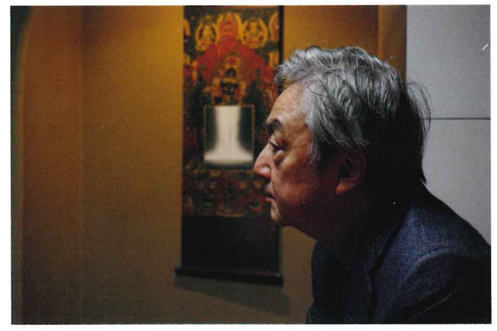
対談

千住博×安藤礼二

「間（あいだ）」で考える日本美術

現代においても、日本人の心を表現するものとして広く人気を獲得し続けている日本画。一方、明治期に国策の一環として作り出されたこのジャンルが現在どのような「日本らしさ」を継承しているかは宙吊りになっている。今回は日本画特集であるものの、まずはいったん日本というジャンルの括りを外し、日本美術を生み出してきた日本という土壌について再考してみたい。そこで、日本画家として世界で活躍し続けている千住博と、日本近代思想史、民俗学などをベースに評論活動を行う安藤礼二に対談をしていただいた。



日本美術の4つの特徴

千住　今に通じる日本の美術が顕在化するのは平安時代以降ですよね。それ以前の美術品は現代の美術に関連する日本らしさがあまり見えてこない。

　その上で言うと、私たちが踏まえる日本文化の特徴というのは4つあると思っています。まずは自然の側に身を置くこと。次に抽象と具象のハイブリッドであること。3つ目に「いま・ここ」を描くこと。来世でも神話の世界でもないと。4つ目に静けさに至るということ。無音ということではありません。たとえば松尾芭蕉（1644～1694）は「閑さや岩にしみ入る蝉の声」と詠みましたが、「閑さ」と言っても蝉の声が聞こえています。また、同じく芭蕉の「古池や蛙飛び込む水の音」という句にも我々は静けさを感じる。つまりここでの静けさというのは自然の織りなすハーモニーなんですね。

安藤　非常に腑に落ちるお話です。いま芭蕉の名前が挙がりましたが、彼が『おくのほそ道』で訪れている平泉は、自然そのものの中に築かれ、宗教都市でも芸術都市でもあったような都市です。それが芭蕉の時代にはすでに廃墟となり、静けさの中に様々なものが生まれてきているということに彼はダイナミズムを感じているわけです。

　平泉も平安時代に築かれましたが、平安から鎌倉にかけての建築、仏像、絵画、いずれにおいても千住先生がおっしゃった4つの要素が溶け合っていますね。滋賀の向源寺には、平安初期に彫られた十一面観音立像があります。観音像はインドから中国を経て伝わったものですが、この十一面観音立像は、インド・中国の観音像に比べて優しい顔立ちをしており、自然そのものを体現しているように思われます。また、具象的でありながら、男性・女性の別を超えてしまうような抽象性がある。

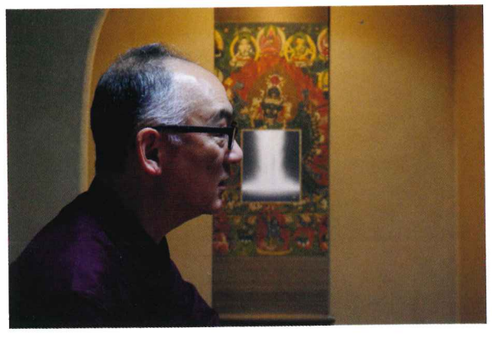
千住　日本美術を代表すると言っていい桂離宮を訪れたとき、磨かれたかのようなつるつるの敷石がずっと続くことに驚きました。普通の速度で歩いたらひっくり返ってしまうわけで、外の時間を持ち込ませない装置になっている。それで桂離宮が指定する速度で――つまりとてもゆっくりと――抽象と具象を含んだ日本庭園、虚と実を内蔵した建築物を見ていくことで、様々なことの境界線が取り払われていくような不思議な体験をしました。そして最後に、風景の合間から月が現れるのが圧巻でした。月も、永遠であると同時に、現れては消えていくという意味では一瞬でもあるという存在ですね。

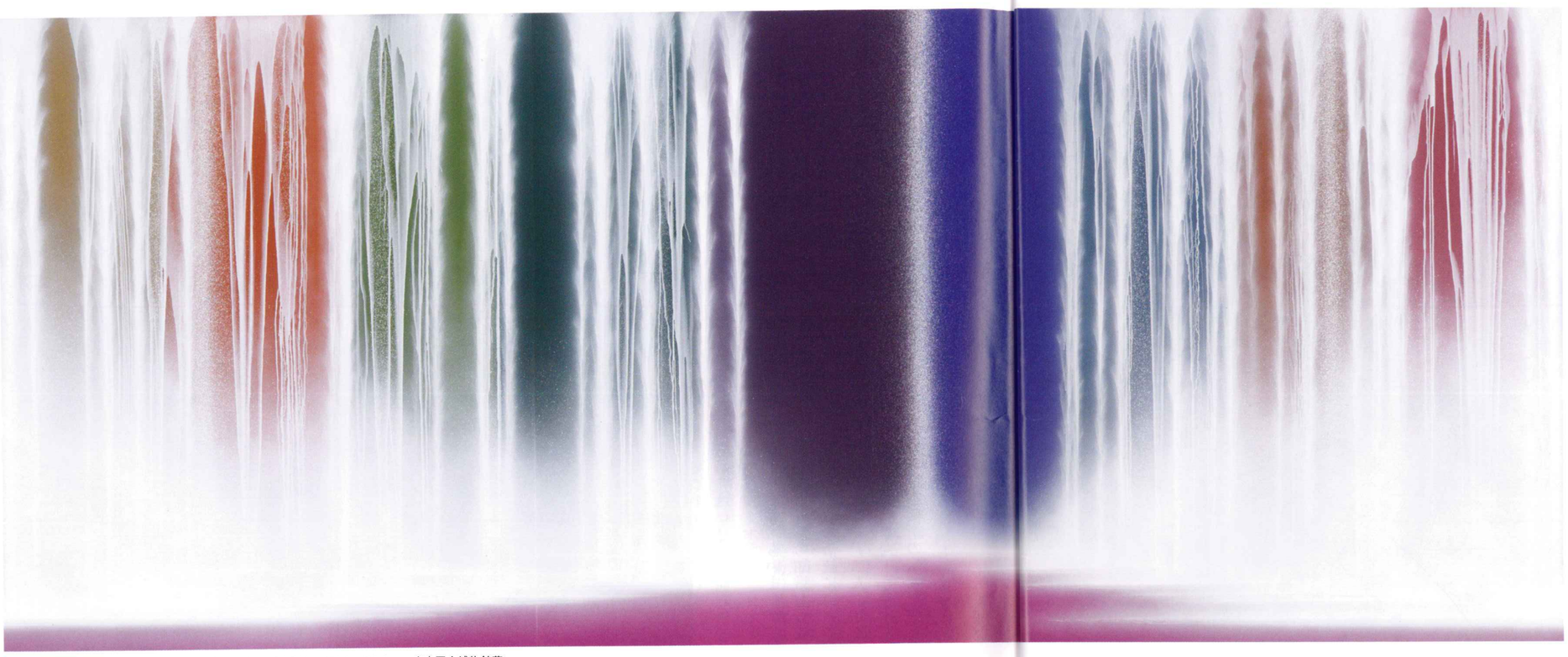
安藤　**日本美術には、そういった対照的なものが調和を保つ場所性が重要なのではないかと思います。**

千住　そうですね。私は滝を描いていますが、滝は水が重力に従って下に流れ、水面に叩きつけられると同時に重力に抗って飛沫となり、闇へと消えていく。そこにある二面性を一枚の絵画の中に入れ込みたいと思ったのです。自分の作品が、一枚で世界の成り立ちを表すものであってほしいんです。

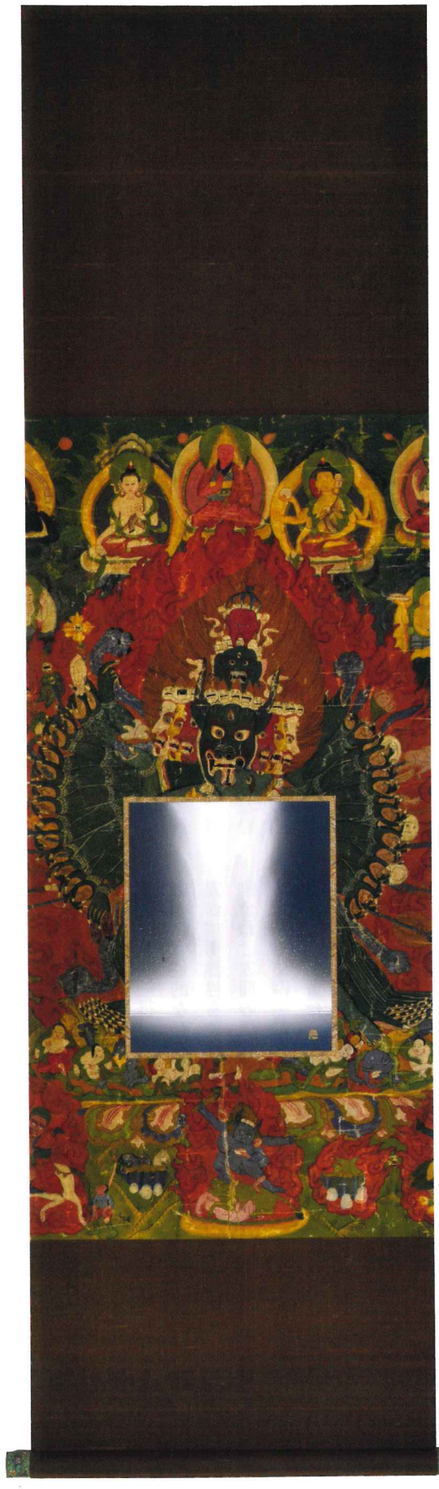
　そのときに大切なのは、多様で混沌としたすべてを受け入れるということです。美しい形だけで絵を組み立てるのではありません。**意図せぬ形になったとしてもそれを受け入れ、同時に私たちが美として感じられるように次の一手を打っていく。**これは人間社会と同じです。

安藤　千住先生の滝を見ると那智の滝を思い出しますが、熊野信仰が生まれたのは、人々が滝のそういった性質





千住博「ウォーターフォール・オン・カラーズ」2024年　紙本彩色　193.9×486.3cm　奈良国立博物館蔵
平安時代以降に日本美術で定着した色を使わず、中国固有の色を用いて制作された。



千住博「ウォーターフォール」2025年　紙本彩色
本紙：27.3×22.0cm　総丈：159.0×49.1cm
裂地：筋廻し＝奈良蜀江文様銀らん裂地　中廻し＝ネパール古代曼荼羅
天地＝紬別織裂地　軸先＝七宝焼

の理由として、奈良の人たちが高度な文明に触れ、強く刺激を受け、自分たちの空気感に合った文化を作ろうという意識が覚醒したのかもしれません。

とはいえそれがはっきりと発現するのは平安中期の国風文化です。その完成形の一つが紫式部（973頃～1014頃）の『源氏物語』で、先ほど挙げた4つの日本文化の要素をすべて兼ね備えた作品です。というより、これがまさに『源氏物語』の特色なのです。たとえば、ストーリー的な盛り上がりをすべて和歌に託しているし、心情を草花や天候といった自然の現象によって描写している。それゆえ、**生々しい人間関係の出来事であるにもかかわらず、それが非常に抽象化されています。**

日本美術は、紫式部のコンセプトから影響されて確立していったと言えるのではないでしょうか。鎌倉時代に制作された「紫式部日記絵巻」（次頁）も、その4要素をすべて有しており、日本美術の基軸になる作品だと思います。

安藤　おっしゃる通りだと思います。さらに言うと、唐の文化を日本風に変換していく上で、空海（774～835）の存在はきわめて重要ではないでしょうか。彼は日本の仏教者の中で唯一、身体性を徹底的に重視した人物です。『源氏物語』をはじめとする**日本文化の表現性、「いま・ここ」性は、空海の身体性を介して生まれたのだと思います。**

千住　なるほど。真言密教はすごい荒行で自らの心をリセットしようとしますが、そこも身体性という話に結びつくのでしょうね。

安藤　はい。室戸岬の御厨人窟（みくろど）に入って、自然の只中に自らの身体を置き、その感覚を歌で表現していった。空海は漢詩の達人ですが、彼の理論を深めていくことで漢詩から和歌が生まれたと考えられます。

千住　私は夜に御厨人窟の中から空を見たとき、自分が透明になって、宇宙と一体化したような感覚になりました。そして背後の森には豊かなアニミズムの世界がある。菌から植物、昆虫、様々な動物たち、あらゆる生物が蠢く気配を感じて、お大師様（空海）は真言密教の思想を深められたと思うんです。

安藤　空海が著した『即身成仏義』も『声字実相義』も、核心の部分は詩の形で書かれています。宇宙が歌うかのような形式ですね。

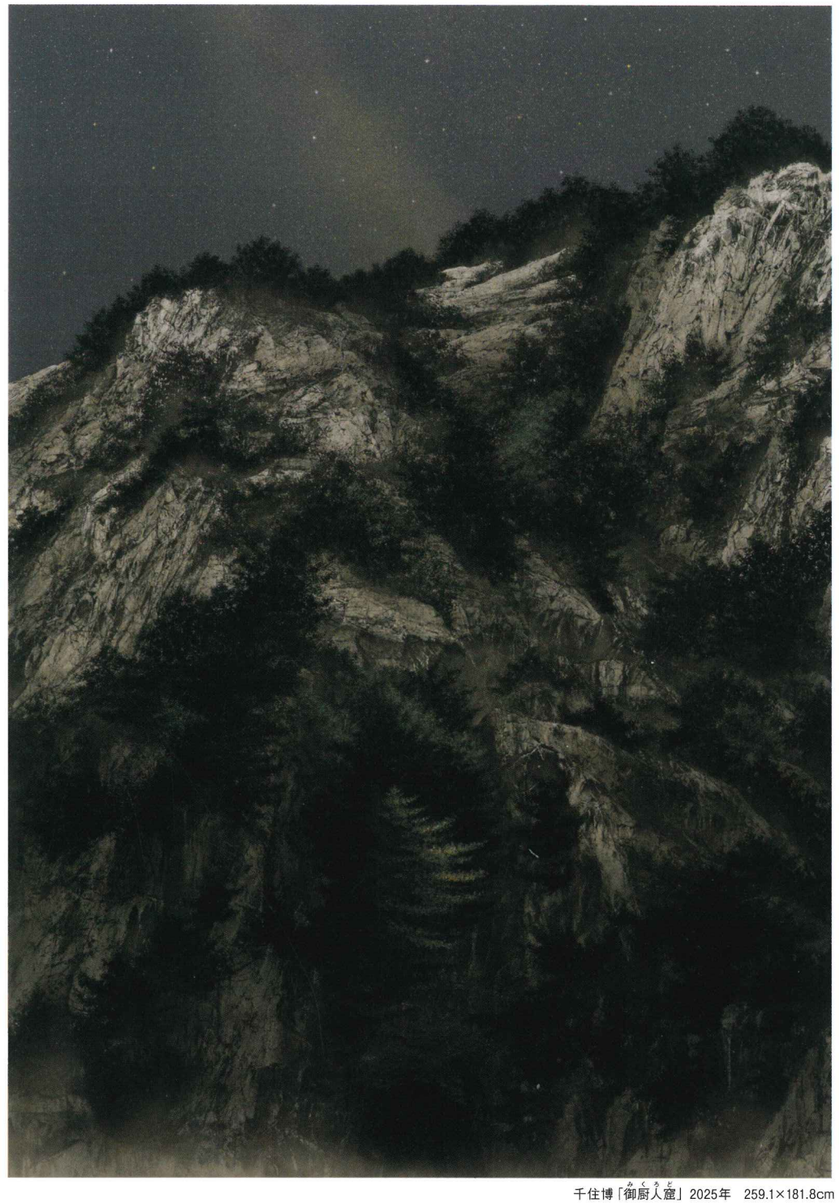
私は文芸評論家という立場ですが、現代文学だけ論じていてもダメで、結局空海くらいまで遡って文学表現とは何かと考えなければならないと感じています。それは美術も同じかもしれません。

千住　おっしゃる通りです。日本画は明治以降の概念ですが、明治以降のことだけ考えていても日本画のことはわからない。伝統とは、はるかそれ以前から始まっているということです。天心の造語である「日本画」に拘泥していると、見あやまるに聖性を見出していたからでしょうね。

ところで熊野の近くに生まれた人物に南方熊楠（1867～1941）がいます。那智の滝の運動を日々感じながら、粘菌というごく小さな世界で、生命の流動を捉えていたわけですね。同世代には鈴木大拙（1870～1966）もいますが、彼はグローバルな科学の知識も吸収しつつ、日本の仏教の伝統について研究しました。そして、二人よりやや年上の岡倉覚三（天心、1863～1913）は、日本美術の伝統を守りつつ、西洋絵画も意識した革新を行い、「日本画」誕生の端緒となった。こうした、平安以来の日本文化を理解しつつ近代的に解釈し直した人々に関心をもっています。

――「日本画」という概念が成立した政治的な経緯は今日、批判的に見直されることもあります。天心の功罪についてもう少し詳しく聞かせていただけますか。

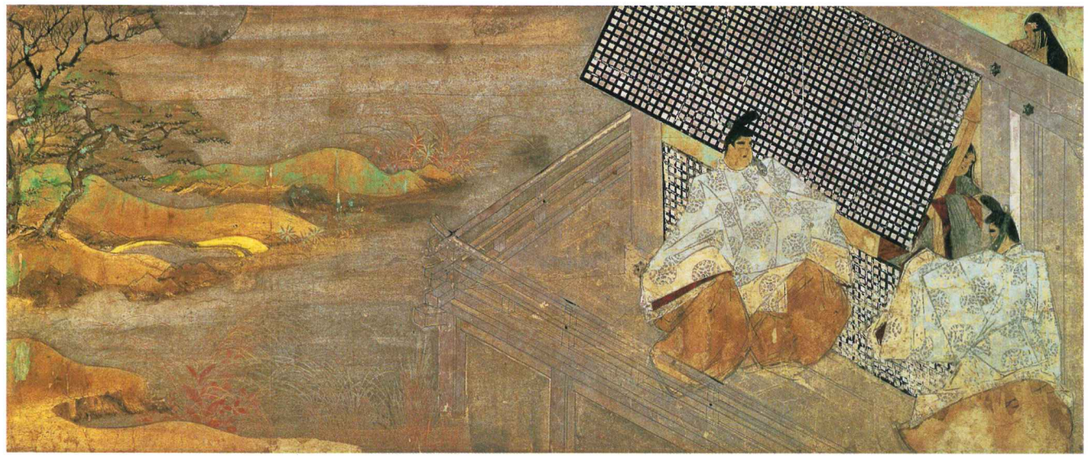
安藤　ヒンドゥー教の僧スワミ・ヴィヴェカーナンダの思想に感動した天心は、インド各地を旅します。その足跡を見ていくと、伝統的なヒンドゥー教だけでなく、いろいろな宗教を折衷し、グローバルな思想を築こうとしていたようです。天心を絶対視するわけにはいかないですが、かといって全否定するのでもなく、「日本画」を定義し直すための一つの参照基準とすべきではないでしょうか。



千住博「御厨人窟（みくろど）」2025年　259.1×181.8cm

空海と紫式部を繋ぐ

千住　正倉院の宝物は、かつて多くが唐から来たものだと思われてきました。ところが近年研究が進み、9割は日本で作られたものだとわかったそうです。私は、奈良時代の日本の美術品がどこまで唐と同じなのだろうと思い、奈良国立博物館の学芸員の方々にご協力をいただきながら、その作品群を可能な限り見てきました。すると、どうも色が奈良と唐とでは少し違うんですね。そこで、さらに中国の色を見てみようと北京に行ってみると、同じ色でも羊の乳が混ざったような色をしているんですが、日本の場合くぐもったグレーのような感じなんです。この違いの理由として明確なのは、まずは風土が違うからでしょう。そしてもう一つ



国宝「紫式部日記絵巻」五島本第一段の絵の部分　鎌倉時代初期　五島美術館蔵

ことが少なくありません。

安藤　空海が日本的なるものを「発見」したのには、日本語と中国語、さらにサンスクリット語を解したということも重要だと思います。日本語と中国語だけでは対立になってしまいますが、3言語あったことで普遍的なものが発見されたのではないかと。そしてそれを徹底的に突き詰めていくと『源氏物語』のような形式になるのだろうと思います。

千住　内容についても考えてみますと、光源氏って実体がないですよね。どのように死んだかも詳しく書かれていない。『源氏物語』はそんな象徴としてのまさに光のように透明な存在を中心に、多彩な女性たちの関係性を表現することができた。最後のエピソードである「夢浮橋」では、浮舟という女性が理知的な薫、肉体的な匂宮という二人の男性を両方拒むさまが描かれ、人類史上最も早く、女性の自立が描かれているとも言えます。

安藤　あの時代に女性のもつ力を重視したのもまた、真言密教であったと思うんです。洞窟というのが象徴的ですが、大日如来は胎蔵界という母体のようなものから生まれてくるわけで、いわば女性原理を中心にしています。そのようなパラダイムチェンジがあったから、『源氏物語』や、「男もすなる日記といふものを女もしてみむとてするなり」で始まる紀貫之（870頃～945頃）の『土佐日記』も生まれてくる。別の言い方をすると、空海の思想を土着化、あるいは大成させたのがそういった文学作品だったのではないでしょうか。

千住　大変納得できる話です。お大師様は女性的な存在と切り離せませんが、男性性も強く兼ね備えていますよね。人間の煩悩や欲望を悟りのエネルギーに変換する方法を示す「理趣経」を重視しています。

安藤　**官能性を否定しない**ということですよね。これは日本の芸術を考えるのにとても重要なポイントだと思います。

千住　「紫式部日記絵巻」五島本第一段では、右側にいる人物が直線で表された人工空間の中でどこか居心地悪そうで、腰が浮いているように見えます。そして左側に描かれる自然空間は、忍び寄るカオスのようで、人物の心情を表現しています。これはまさにエロスですよね。

安藤　ついなんでも空海に結びつけてしまい恐縮ですが、空海の教えを表現しようとした東寺の立体曼荼羅の中で象られている五大明王も、すごい身体の運動がありますよね。それも人間の身体を超えてしまうような。日本で見られる不動明王像は西安にある像を参照しているとされるのですが、あちらはもっとふくよかで、大理石の白なんですよ。

千住　私は奈良国立博物館の「空海KŪKAI―密教のルーツとマンダラ世界」展（2024年）で驚くべき体験をしました。「金剛界曼荼羅」と「胎蔵界曼荼羅」が壁にかかっていて、その手前に立体曼荼羅が再現されているのを見て、立体曼荼羅から仏様たちがみんな出てきて、それを見ている人々の中に入っていくように思えたんです。その後、仏具が展示されている様を見ていると、美術品ではなく、仏様が入った人々が自分たちの道具を見ているように思えた。そして彼らとともに博物館の外へ出ていくことで、この世界に広がるあらゆるものが命であり、仏であると感じました。おかしいと思われるかもしれませんが、私にとっては実体験です。

安藤　モノも生命であるという日本の芸術的な感覚を体現するような体験ですね。

体験と素材こそが重要

千住　我々はあらゆるものに価格がつく資本主義社会を生きていますが、そんな社会で最も価値の高いものとは最も高価なものではなく、人々が価格をつけるのをやめたものだと思います。私はそれこそが芸術だと思うのです。

安藤　そうですね。ただし、その芸術とは未知のものを作り上げているのでなければなりません。それを生み出すのは自然とのコミュニケーションしかないと思います。

千住　その通りです。特にこのデジタル社会では、デジタルでは表現できないものこそが芸術の根幹となります。人間がデジタルではないからです。人間はアナログなのです。それは、**一つは、モノそのものを具体的に捉えたときの、そこにしかない触覚です。**日本画における岩絵具はデジタル社会において、アナログである人間が生きていく上で欠くことのできない芸術のエレメントとなる可能性があるかもしれません。

安藤　空海、紫式部、さらにその要素を舞台芸術に敷衍（ふえん）した世阿弥（1363?～1443?）といった日本を代表する芸術家たちは、いま千住先生がおっしゃったような**固有性と、その固有性を抽象化することで成立する世界性とでも言いうる性質を両方もっていた**と思います。そこが日本美術の長所であり、逆に言うとヨーロッパの芸術と価値観の合いにくいところです。

　私は美術大学に勤めるようになって、岩絵具というまさに自然から作った素材を使うという感覚をはじめて知ったんですよ。これは知っているのと知らないのとで全く見え方が違いますね。

千住　はい。最近は人工の岩絵具もありますが、素材を手に取ることで手のひらで知覚する自然と一体化する体験は、バーチャルやAIの嘘か本当かわからない情報が跋扈する今の社会において非常に重要で、その中で画家たちはいろいろなことを思いついていくんですよ。ですから、私たち日本画を描く者が考える日本画の意識は、世間で評論家がパソコンに向かって考える日本画とかなり違う。自分の手で地球の粉末を触るという体験価値が先にあるのであって、それを無視してコンセプトだけ語る机上の言葉が多いのは残念なことです。

――「三越伊勢丹・千住博日本画大賞展」の入選者をはじめ、近年、中華圏や韓国などから留学してきた方々が優れた日本画を発表しています。いまお二人がおっしゃっていたような日本芸術の面白さが同じく東アジア圏の国々にも伝わるということでしょうか。

千住　逆ではないかと思います。日本画はすべて中国から伝わったものでできています。しかし中国は何度も中央政府が変わっているので、かつての技法などがあまり残っていない。だから中国の優秀な人がいま日本に失われた中国絵画を見つけにきているのです。

安藤　私もそう思います。空海の『文鏡秘府論』という漢詩論は、中国の様々な書物から引用していますが、その中には中国では散逸してしまっているものも多い。そのため、いま台湾の漢詩の研究者が空海を読んでいるんですよ。

千住　日本の伝統とは何かということをあまり深く考えていない日本画家は多い。一方で、中華圏出身の日本画家の表現を見ていると、外からの方が可能性を再発見できるものなのだとわかります。

――今後、たとえば「日本らしさ」と「中国らしさ」は混交していくと思いますか。それともそれぞれがさらに際立つのでしょうか。

千住　日本思想とは東洋思想の一部です。しかし同時に日本らしさと中国らしさはとても違うのです。中国から来た若い留学生の作品などをよく見ると、中国の文化の素晴らしいエッセンスが入っています。しかし同時に、抵抗なく中国思想にはもともとない日本的要素、つまり素材感とか自然の景観も含んでいる。宋元時代のような神仙思想的な宇宙としての自然の捉え方ではなく、**もっと身近な自然の側に身を置いている感覚を、かつこれまでの日本画とも違う現代的な切り口で描き、自らの興味を示している**のです。日本画は比較の中で境界を超えた表現になっていくかもしれません。そして長い年月をかけて新しい国際色豊かな未来の日本画が築かれてゆくのでしょう。

安藤　「間（あいだ）」で考えるということなのでしょうね。空海であれば、日本と中国、インドの間で考えた。千住先生も日本と世界との間で、現代美術の歴史の中で日本画とは何なのかと考えていらっしゃる。

千住　お大師様がいたときの長安は、全世界から人が集まり、唯一の百万都市でした。私が世界基準を見極めつつ、様々な文化との比較の中で日本文化を牽引しようという使命感に燃えて渡った1990年代のニューヨークと、長安は似たような立ち位置ですね。お大師様も同じ思いだったのではないかと思います。

（文・田村晨一郎）



せんじゅ・ひろし
1958年生まれ。東京藝術大学卒業、同大学院修了。95年ヴェネチア・ビエンナーレ名誉賞。イサム・ノグチ賞、恩賜賞・日本藝術院賞受賞。メトロポリタン美術館、英国国立ヴィクトリア&アルバート博物館等に常設。高野山金剛峯寺等に収蔵、2024年建物とともに重文指定。22年日本藝術院会員。

あんどう・れいじ
1967年東京都生まれ。早稲田大学第一文学部卒業。多摩美術大学教授、同大学図書館情報センター長。2002年「神々の闘争―折口信夫論―」で群像新人文学賞評論部門優秀作受賞。06年同作品の単行本（講談社）で芸術選奨文部科学大臣新人賞受賞。09年『光の曼陀羅 日本文学論』（同）で大江健三郎賞受賞。近著に『空海』（同、25年）。



石谷滋規 「一本釣り」3号F



桃山 三 「恵比寿天-1」20×20cm



藤原宇希子 「わたしのおふね」3号F



平良志季 「大漁大漁」8号

大漁旗展

—日本画で纏う、縁起と華やぎ—

2026年1月9日(金)～1月25日(日)
11時～18時　月曜休廊

石谷滋規
大矢 亮
古賀くらら
白石綾奈
平良志季
藤原宇希子
桃山 三
山下孝治

［お問い合わせ］
ARTLINK GALLERY
アートリンクギャラリー
〒444-0051 愛知県岡崎市
本町通1-12 サンアベニュー 1F
TEL.0564-25-8755
www.artlinkgallery.com

アートコレクターズ 定期購読のご案内

定期購読料　送料無料 税込

12冊　1冊定価 1,200円 →1冊あたり 1,166円
¥14,000

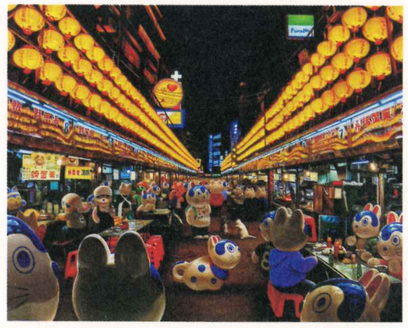
24冊　1冊定価 1,200円 →1冊あたり 1,000円
¥24,000

※お電話でお申込の場合、ご注文をいただいた後、ご契約内容の確認書とご一緒に、ゆうちょ銀行のお振込用紙をお送りいたします（振込手数料は弊社負担）。弊社ホームページでお申込の場合、クレジットカード払い、ゆうちょ銀行振込、銀行振込と決済方法がお選びいただけます。詳細はホームページをご確認ください。
※お届け日は店頭発売日（毎月25日、25日が日祝日の場合は24日）を目安としておりますが、諸般の事情により配達が遅れる場合がございます。
※中途解約はご容赦願います。

定期購読をオススメする4つの理由

1. 通常430円の送料がタダ！ 毎月無料でご自宅にお届けします。
2. 定期購読だけの特別価格。 1冊ずつ買うよりもお得です！
3. 下記のお電話または弊社ホームページから 簡単にお申し込みができます。
4. 定期購読だから、 人気の号のお買い逃しもありません。

定期購読のお問い合わせ・お申込先
株式会社 生活の友社
TEL.03-3564-6900　FAX.03-3564-6901
〒104-0061 東京都中央区銀座1-13-12 銀友ビル4F
ホームページ　https://www.tomosha.com/



松本央「Every day night fever」油彩、キャンバス、パネル　30号F

次号 2 月号の巻頭特集は…

完売作家 2026(仮)

プライマリーでの展示実績という切り口で、アートマーケットを定点観測する恒例の企画です。アートマーケット停滞が叫ばれる中、それでも表現を生み出し続ける作家の活動の軌跡を目に見える形で振り返ります。また、近年勢いを増している、既存のギャラリービジネスに依拠しない方法でコレクターを創出しているギャラリーや作家にも注目。アートマーケットの現在地を知る必見の号となっております。

1月23日(金)発売

2026年1月号
第19巻第1号通巻193号
2025年12月25日発行・発売　定価 本体1,091円＋税

編集・発行人／一井義寛
表紙デザイン／AD：河北秀也
D：栗林成光、野中美咲

発行所／株式会社 生活の友社
〒104-0061 東京都中央区銀座1-13-12 銀友ビル4階
TEL. 03-3564-6900
振替／00110-9-146002

© 禁無断転載